

【 復活讃詞 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖 神 共 始
 なきことばわがすくいのため
 言 吾 救 爲 に
 どうていぢょよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 讃 歌
 おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身
 じゅうじかにのぼりしをしのびそのこ
 十 字 架 上 死 忍 其 光
 うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者
 ふくかつせしめたまえばな
 復 活 給 え ば な り 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 いつもよよに、アミン。
 何時 世 世
 しととひとしくどうぞなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教 聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、あめ、および
 爾 羊 群 爲
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全 世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給。

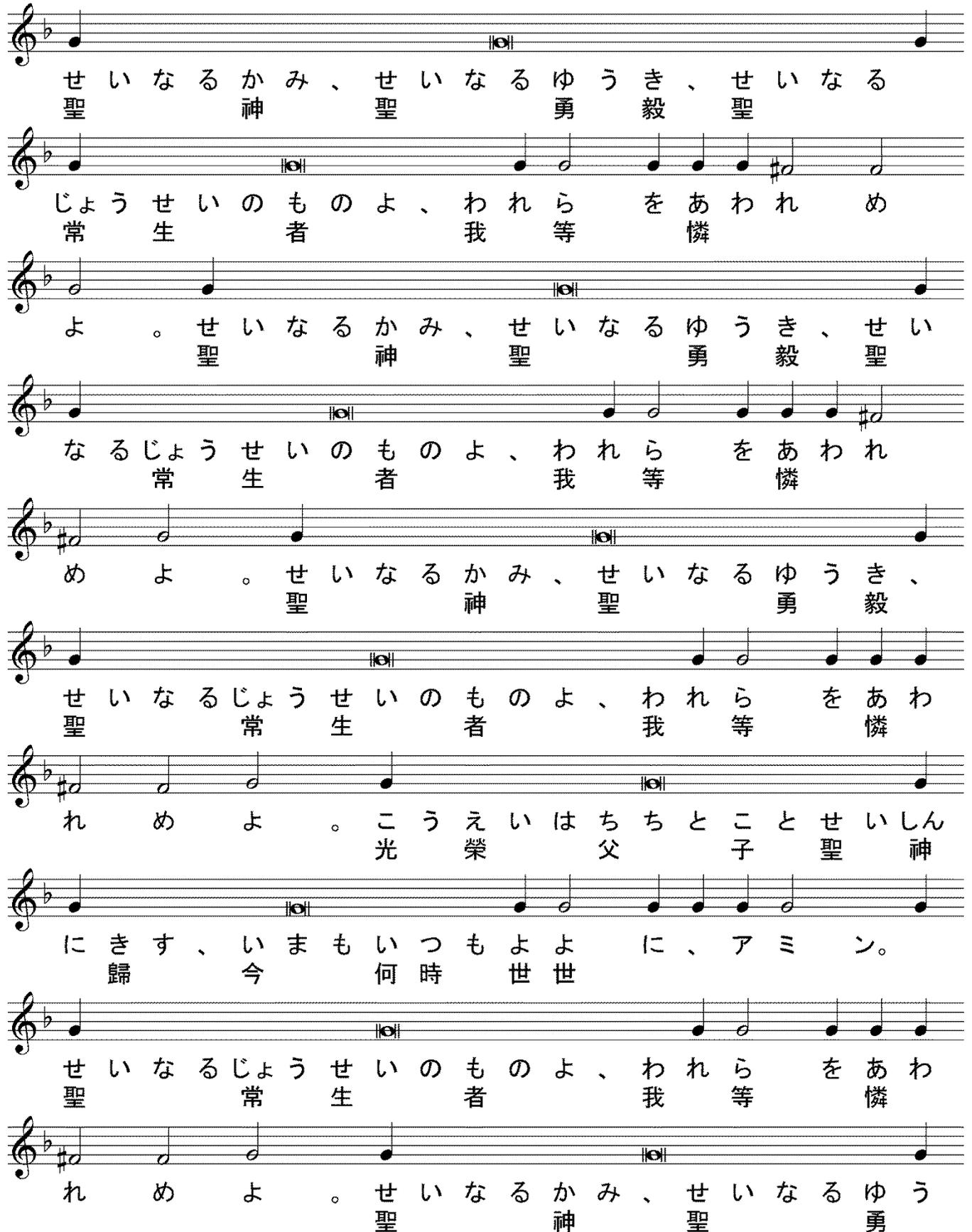
司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世よ

に、



【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等
 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、へルヴィムざに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國
 の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よに、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人へいあんに平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

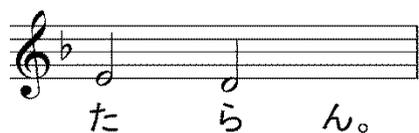
司祭) 睿えいち智、

誦經) プロキメン、主しゅよ、爾なんぢは我われ等らを保たもち、我われ等らを護まもりて、斯この世よより永えい遠えんに至いたらん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) 主しゅよ、我われを救すくい給たまえ、蓋けだしぎじん義人たは絶たえたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 至



誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



【 使徒經 (アポストロス) 135 端 コリント前書 6 章 12~20 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我

に許されたり、然れども其一も我に主たるべからず。食は腹の爲、腹は食の爲なり、

然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身

の爲なり。神は主を復活せしめたり、其能を以て我等をも復活せしめん。豈知らず

や、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて、淫婦の肢と爲さ

んか、然すべからず。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、蓋云えるあ

り、二の者は一體と爲らんと。然れども主に附く者は主と一神と爲るなり。淫行を避

けよ、凡そ人の行う罪は身の外に在り、然れども淫を行ふ者は己の身を犯すな

り。豈知らずや、爾等の身は爾等の衷に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にし

て、爾等己に屬するに非ざるを。蓋爾等は價を以て買われたり、故に均しく神に

屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、アレルイヤ、

【 アレルイヤ 主日第5調 】

司祭) 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世世に爾の眞實を傳えん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 蓋我言う、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

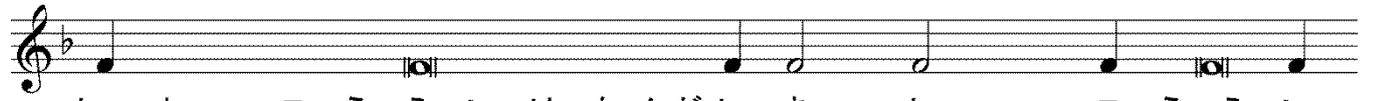
【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書79端 15章11~32節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

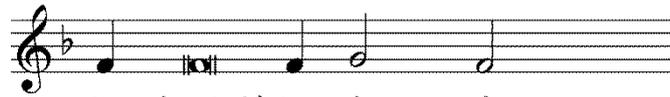


なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或人に二の子あり、其次子父に謂え

り、父よ、我が得べき産業の分を我に與えよ、父其産業を彼等に分てり。幾日も經

ざるに、次子は其得たる者を盡く集めて、遠き地に旅行し、彼処に放蕩に生活して、

其産業を浪費せり。盡く耗しに及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始め

て乏しきを覺えたり。乃往きて、其地の住民の一に身を寄せたれば、其人彼を田に

遣して豕を牧わしめたり。彼は豕の食う豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、

彼に與うる者なかりき。遂に自ら省みて曰えり、我が父には幾何かの傭人の糧に

餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天及び

爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず、我を爾が傭人の一の

如く爲せと。乃起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て憫み、趨り

前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天及び爾の前に

罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は其諸僕に謂えり、最も

美しき衣を出して、彼に衣せよ、指環を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる犢

を牽きて、之を宰れ、我等食い樂しまん。蓋此の我が子は死して復生き、失われて又得

られたり。是に於て彼等樂しめり。適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、

樂と舞とを聞きたれば、一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問いしに、彼曰えり、爾の弟

きた なんぢ ちち そのつつが かれ え よ こ こうし ほふ
來りしなり、爾の父は、其 恙 なくして彼を得たるに困りて、肥えたる 犢 を宰りたり。

ちょうしいか い ほつ そのちちい かれ すす かれちち こた い み
長 子 怒りて、入るを欲せざりき。其 父 出でて、彼に勧めしに、彼 父に 答えて 曰えり、視

われたねんなんぢ つか いま かつ なんぢ めい たが なんぢいま かつ こやぎ われ
よ、我 多年 爾 に事えて、未だ 嘗て 爾 の命に 違わざれども、爾 未だ 嘗て 小山羊を我

あた われ とも とも たの しか こ なんぢ こ あそびめ とも なんぢ さん
に 與えて、我を友と 共に 樂しましめざりき。然るに此の 爾 の子、 妓 と共に 爾 の産

ぎょう ついや もの きた とき なんぢかれ ため こ こうし ほふ ちちかれ い こ
業 を 耗しし者の 來りし時は、爾 彼の爲に 肥えたる 犢 を宰れり。父 彼に 謂えり、子

なんぢ つね われ とも あ われ ぞく もの みななんぢ ぞく ただこ なんぢ おとうと し
よ、爾 は常に 我と 偕に 在り、我に 屬する者は 皆 爾 に 屬す。惟此の 爾 の 弟 は死し

またい うしな またえ ゆえ われらよるこ たの
て 復 生き、 失 われて、 又 得られたるが 故に、我等 喜 び 樂しむべきなり。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸 す。